



第35回 日本義肢装具学会学術大会
ランチョンセミナー5 (LS-5)

日 時 **7月14日(日)**
12:40～13:40

会 場 **第2会場**
仙台国際センター
会議棟 2F 桜



変形性関節症のない股関節痛に対する 鏡視下手術と術後リハビリテーションの実際

座長 **木島 泰明 先生** 秋田大学大学院
医学系研究科医学専攻機能展開医学系整形外科学講座 助教

演者 **内田 宗志 先生** 産業医科大学若松病院
整形外科 診療教授

認定単位 N 整形外科専門医資格継続単位 1 単位
必須分野：11 骨盤・股関節疾患 または、13 リハビリテーション（理学療法・義肢装具を含む）
または、Re 運動器リハビリテーション医資格継続単位 1 単位
リハビリテーション科専門医 1 単位
大区分：必須領域 主分類：7 骨関節疾患

本ランチョンセミナーは
整理券制です

■ **配布場所**：ランチョンセミナー整理券配布所（仙台国際センター展示棟 1F 展示室内）
■ **配布時間**：2019年7月14日（日）8:00～11:30（なくなり次第終了）
【注意事項】整理券は、セミナー開始5分後に無効となります。



内田 宗志
産業医科大学若松病院 整形外科

変形性関節症のない股関節痛に対する 鏡視下手術と術後リハビリテーションの実際

変形性関節症のない股関節痛に対しては、今まで診断が難しく、患者に痛みがあってもレントゲン写真で異常がないという理由で、放置されることがしばしばある。近年、MRI及び超音波画像診断、さらには鏡視下手術の技術が格段に進歩してきたことにより、病態の解明が急速に進歩してきた。そして、疼痛の原因を解剖学的レイヤー別で診断ができるようになってきた。股関節唇損傷の原因である大腿骨寛骨臼インピンジメント (FAI) に対する股関節鏡視下手術も安定した臨床成績を供与することが可能となった。さらに症例数の増加により、股関節鏡視下手術の術後のリハビリテーションも安全に遂行することが可能となった。

本発表の目的は、股関節痛の診断と鏡視下手術の適応、さらに術後のリハビリテーションについて解説することである。

内容：股関節痛の原因として、解剖学的レイヤー別アプローチを行なっている。レイヤー1：軟骨層レイヤー、レイヤー2：不活性レイヤー、関節包靭帯静的安定性に寄与する、レイヤー3：ダイナミックレイヤーは筋肉のレイヤーであり動的安定性に貢献する。そしてレイヤー4：神経メカニカルレイヤーである。身体所見、画像診断、超音波ガイド下関節内ブロックやハイドロリリースを行い、器質的病変があるか、機能的な問題だけなのかを診断する。手術適応として最も多いのがFAIに伴う股関節唇損傷である。

股関節鏡視下手術では、インピンジメントがある骨隆起部分を切除して形成し、インピンジメントを解消させる。関節唇を修復し、関節包を縫縮することで関節を安定させることを目標としている。手術視野を確保するため

に関節包を部分的に切離す。手術の最後に関節包を縫縮するが、術後早期は縫縮部分を保護するため関節包の縫縮部への配慮が必要である。術後は関節包の伸長ストレスを避けることが重要になる。当院では腸骨大腿靭帯の伸長位である①伸展、②外旋、③内転を術後3週間は禁止し、装具を装着する。日本シグマックス株式会社とともに開発したSU Hip Braceは、先に述べた動作(特に伸展・内転)を制限し、大転子を求心位へ誘導する専用ストラップを備えている。これにより股関節の安定性を保ち、理想的な肢位を維持することで、患者様に安心感を与えることができ、術後の入院生活、リハビリを進めていく中での不安要素を減らすことに貢献できる。当該装具は、股関節の脱臼予防にも有効である。具体的には、人工股関節置換術後や、人工骨頭置換術後などの脱臼リスクの管理方法の一つとして使用できると考えている。

術後のリハビリテーションは、Phase 1：保護期は、サーカムダクションを行い癒着防止と、四つ這い動作による骨盤と脊椎の動作の獲得を開始する。Phase 2：安定期は、関節包や関節唇の治癒機転進んでいる術後一ヶ月くらいから開始する。主に骨盤底筋を中心とする体幹筋力強化を中心とし、歩行を安定させる。Phase 3：筋力増強期、関節可動域及び歩行機能が正常に回復すれば、股関節周囲及び体幹筋力をさらに増強させる。Phase 4：スポーツ復帰と進める。

本講演を通じて、股関節痛で困っている先生の診療の一助となれば幸いです。

■略歴 産業医科大学若松病院 整形外科 診療教授。国際股関節鏡学会 (ISHA) 理事、アジア股関節鏡学会 (ASHA) 理事、国際関節鏡膝スポーツ整形外科学会 (ISAKOS) News letter committee、日本股関節学会評議委員、日本膝関節鏡スポーツ整形外科学会評議委員、北米関節鏡学会 (AANA) associate master instructor、アメリカスポーツ整形外科学会 AOSSM ISAKOS hip course faculty
1992年産業医科大学卒業、関東労災病院勤務を経て、1996年大学院入学 2000年卒業博士号取得。2002年からトロント大学博士研究員として間葉系幹細胞の研究に従事。関連病院を経て、2011年より現職。

■賞 2003年 上原生命科学財団リサーチフェローシップ
2003年 Canadian arthritis network
postdoctoral fellowship award
2007年 整形災害外科助成財団 マルホ賞
2008年 産業医学重点研究
2013年 国際股関節鏡学会 最優秀 e-poster 賞

■資格 日本スポーツ協会公認スポーツドクター
労働衛生コンサルタント (保健衛生)
日本整形外科学会専門医
学術論文編集委員
Journal of Orthopaedic Science: Editorial Board
American Journal of Sports Medicine: Principle Reviewer
Hip and Pelvis: Editorial Board

New⁺ SU Hip Brace エスユーヒップブレース / 股関節装具 SU

適切な動作制限による股関節のサポートと装着時の快適性を両立した股関節装具

- 股関節の屈曲、伸展を制限するアルミ製ヒンジ
- 体型に合わせて調整可能な各種パーツ
- 股関節の不安定性を軽減する股関節ストラップ
- 装着感、快適性を重視したデザイン

